

序説

薩摩藩は、他藩に比べて武士が多かった。3分の1が武士である¹。明治維新後、廃藩置県があり、薩摩藩が鹿児島県になった。薩摩藩の武士は食べるのに困った。中央では徴兵により武士を集め警察を作った。しかし、地方には余った武士が武士であり続ける有様である。そこで政府は秩禄を与えた。だが財政圧迫により秩禄処分を余儀なくすることになる。その代わりに金禄公債証書を発行する。これが世の中に溢れ出し一時的には安定するもデフレを招き世の中が不安定になった。地方は政府に上申、内容もままならないうちに、「授産事業」という名の下でありとあらゆる事業が興る。そのような情勢の中で、又七も例外ではなく波に乗って「武士の商法」²で商いに興じる。結果失敗するが、一人の男の人生として回想してみたい。

第1章 又七と金禄公債証書

図1は、島津又七の金禄証書である。³ 鹿児島士族と呼ばれた人達は、9万5000人で、現金1930万円に達した。明治8年には金禄に改め、9年に金禄公債発行条例を制定して秩禄処分した。その人数は31万3000人、公債1億7300万円、現金73万円、士族平均一人550円である。当時の米価が1石当たり5円～6円であった。⁴島津又七は、金禄361円、公債は4465円であり、表2より平均30～60円であるのに6倍近い。又岩下方平の金禄公債は桁違いに多い。岩下方平は

(1827-1900) (文政10年3月15日 - 明治33年8月14日) は、禄高百七十八石の薩摩藩士⁵で、鹿児島城下上加治屋町で生まれる。安政6年大久保利通等と誠忠組を結成し、首領となる。文久元年には御用人兼軍役奉行

となると、士卒300人を率いて上京した。文久3年には、薩英戦争の講和会議をまとめ、慶応3年の第2回パリ万博に薩摩の使節団長として参加。王政復古後、藩を代表して参与



図1 金禄公債証書渡牒

1 「鹿児島県の歴史」 <族籍別人口表より> P 160

2 「鹿児島市史」 P 751

3 鹿児島県立図書館. 金禄証書渡牒より (藤崎剛氏の提供)

4 「鹿児島市史」 P 616

5 「明治維新人名辞典」 P 130

となり、明治政府では元老院議員、貴族院議員を歴任した。⁶

当時の361円は、概算換算で、×20000円=722万円であり、4465円は、8930万円になろう。岩下方平と島津又七の金禄の差は別として、一所持の身分は相当に安定していた。金禄証書には、島津又七は、隠居とあり、跡久徴とある。又七は文政10年5月18日生まれ、息子久徴は慶応2年生まれである。明治9年の秩禄処分制定の時は、又七49歳、久徴10歳である。久徴の家督相続が、明治11年である。言える事は、又七隠居には余りにも若すぎる。そして息子の家督相続が余りにも若すぎる事は疑問である。がしかし金禄証書により多額の「お金」を賜ることにより新しい人生を始める事は不自然ではないだろう。

名前	金禄	公債	分
島津又七	361円59銭8厘	4465円	73銭5厘
岩下方平	1506円65銭8厘	11295円	4円93銭5厘
知識兼雄	30円13銭3厘	115円	3円51銭9厘
牧野伸熊	36円16銭	710円	8銭
大迫貞清	68円31銭3厘	180円	
別府新介	36円16銭	650円	8銭
別府九郎	36円16銭	140円	1円2銭4厘
上村彦之丞	36円16銭	650円	8銭
大浦兼武	30円13銭3厘	115円	2円51銭9厘

表2 金禄公債比較

第2章 又七と宮司

島津又七の身分は士族より隠居となった。「隠居」は広辞苑によると、世事を捨てて閉居すること。又は家督を譲って隠退すること。地位を退かせて家禄をその子孫に譲らせることとある。又七は、家督と家禄を全て譲って隠居していた訳ではない。

そこで、明治3年・5年に口永良部島に移住をしているのは隠居生活ではない。11人もの人を連れて行ったとある。そして、「大正4年の贈位事蹟調書」⁷によると、明治9年に、霧島神宮宮司を務めたとある。確かに隠居生活としてはとても心平穏なものがある。がしかし、この事は前回論じているのでここでは、追加の論拠だけを記載したい。表3より國學院大學 宮本譽士教授の回答書の要約として、「明治7年11月13日 田尻務初代宮司任

明治7年	2月15日	官幣大社列格
	2月22日	大講義村山松根小宮司任
	6月15日	大山綱良昇格奉告祭
	11月13日	田尻司初代宮司任
明治8年	春	村山松根小宮司内務省出仕

表3 初代宮司田尻司

ぜられ、明治4年5月14日の社格制度の時は、大宮司・小宮司の区別は、制度としてあった。明治7年2月15日に官幣大社列格して、2月22日に大講義村山松根小宮司任ぜられ、大宮司は、この期間には不在であったと資料上考えられる」とのことである。明治12年には、沖縄に第152国立銀行が設立されるが、設立過程において島津又七が関係していることが、「吹上郷土史中」⁸によると「久陽は後沖縄銀行の頭取となったが、銀行が破産した為所有地の口永良部島に引移り彼の地で没した」とある。久陽とは島津登の長男

⁶ 鹿児島県立図書館 貴重資料アーカイブ「岩下方平書」より

⁷ 国立公文書館アーカイブより

⁸ 「吹上郷土史中」P282-283

で永吉家を継いだ人物である。島津又七である事は間違いないが、銀行の頭取を確認する事にする。明治12年は、又七52歳、久徴13歳である。

第3章 又七と銀行出資者

第152国立銀行の設立には、鹿児島士族が関与していると言うよりも薩摩士族が設立した。明治4年の廃藩置県により琉球が沖縄県になった。沖縄県になった時士族の食い扶持は新たな新天地として沖縄に名垂れ込んだ。「沖縄第152国立銀行の変遷」⁹より一部抜粋した表4より考察すると鹿児島県士族が出資している。その中に黄色の個所の人物を見ると、島津久徴・福島巖・有川純治がいる。「鹿児島銀行百年史」¹⁰より表5、表6を引用する。発

起人の中に島津久徴がない。し

氏名	住所	身分	持株
松田通信	鹿児島県鹿児島郡坂元村	士族	120
児玉東一	鹿児島県肝属郡串良郷柏原村	士族	60
田邊格之丞	鹿児島県鹿児島郡潮見町	士族	60
士師荘八郎	鹿児島県鹿児島郡坂元村	士族	60
村田孫平	鹿児島県鹿児島郡潮見町	平民	40

表5 第152国立銀行発起人

かし、株主としては大株主で3番目である。がしかし、取締役にもなっていない。常識的に考えると島津久徴は取締役になっても不思議ではない。合計で、2000株、金額で100000円¹¹、1株=50円で換算すると、120株は、4500円、今では一億円近いお金になる。

氏名	職名	出身
福島巖	頭取	鹿児島県
松田通信	取締役	鹿児島県
児玉東一	取締役	鹿児島県
村田孫平	取締役	鹿児島県
徳田作兵衛	支配人	鹿児島県

表6 創業時取締役

そこで、島津久徴とは何者か。前回のレポートにも記載したが、「沖縄第152国立銀行の変遷」によると、薩摩藩主島津斉彬時代の家老をつとめた人物である。設立に「箔」をつけるのに役立ったとある。¹²「沖縄第百五十二国立銀行の史的研究」によると、島津久徴の住所は、鹿児島県鹿児島郡西田村薬師町である。¹³明治時代の西田村薬師町の「課税台帳」¹⁴で確認ができた。西田村薬師町に、島津久徴があり、そこは島津主殿（島津又七）の住居であった。と言う事は、島津久徴は、島津又七の息子である。しかし、島津久徴は、13

姓名	身分	住所	設立時	増資	合計
松田通信	士	鹿児島県	120	-	120
士師孫大夫	士	鹿児島県	-	97	97
島津久徴	士	鹿児島県	30	60	90
児玉東一	士	鹿児島県	60	-	60
田辺格之丞	士	鹿児島県	60	-	60
士師荘八郎	士	鹿児島県	60	-	60
川北鍊之進	士	鹿児島県	60	-	60
田中 伝	士	鹿児島県	60	-	60
矢野作兵衛	平民	鹿児島県	60	-	60
矢野善佐衛門	平民	鹿児島県	60	-	60
長崎武一郎	士	鹿児島県	60	-	60
徳田作兵衛	平民	鹿児島県	60	-	60
村田孫平	平民	鹿児島県	40	20	60
福島巖	士	鹿児島県	30	30	60
上田ふみ	士	鹿児島県	-	58	58
肥後助三郎	士	鹿児島県	-	54	54
荒巻新兵衛	平民	鹿児島県	40	-	40
田中治右衛門	士	鹿児島県	-	40	40
有川純治	士	鹿児島県	20	20	40
小森政隆	士	鹿児島県	-	40	40
右松有寿	士	鹿児島県	30	-	30
林尚五郎	平民	鹿児島県	30	-	30
村田一郎	平民	鹿児島県	30	-	30
長崎通義	士	鹿児島県	-	30	30
伊勢庸三	平民	鹿児島県	-	30	30
日高佐一郎	士	鹿児島県	-	26	26
須田幸吉	士	鹿児島県	-	25	25
洲辺中介	士	鹿児島県	-	23	23
飛岡卯右衛門	平民	鹿児島県	20	-	20
藤安辰次郎	平民	鹿児島県	20	-	20
丹下伊太郎	平民	鹿児島県	20	-	20
小川市兵衛	平民	鹿児島県	20	-	20
渡辺融	士	東京府	10	10	20
野村治兵衛	士	鹿児島県	-	20	20
精松貞助	士	鹿児島県	-	20	20
相良十佐衛門	士	鹿児島県	-	20	20
川崎龍助	士	鹿児島県	-	20	20

表4 第152国立銀行株主名簿(明治13年3月)

⁹ 「沖縄第百五十二国立銀行の変遷」 <沖縄第百五十二国立銀行の史的研究より作成> P 38-39

¹⁰ 「鹿児島銀行百年史」 P127

¹¹ 「沖縄第百五十二国立銀行の史的研究」 P81-82

¹² 「沖縄第百五十二国立銀行の変遷」 P 36

¹³ 「沖縄第百五十二国立銀行の史的研究」 P

¹⁴ 法務局の土地台帳前身である

歳であったので、隠居の又七が久徴の名前で出資したのであろうか。実は同時期に口永良部島では新たな事業計画が、島津又七を中心に始まっている。ここで黄色の枠の人物、福島巖・有村純治については、後程記載したい。

第4章 又七と「羊毛社」

明治16年に始め22年に抵当公売処分を受けた「口永良部羊毛社」がある。島津又七の名は表立っては出てこないが実際は大きく関わっていた。又七のみならず当時の薩摩士族の名簿がある。表7である。では「羊毛社」の設立に関する経緯について項目整理をする。

①明治15年9月 牧羊社豫算書・殖産概算書¹⁵

- ・細羊試牧ノ儀ニ付願
 - ・試験費概算書
 - ・願人名簿連名
- 鹿児島県令渡邊千秋殿

②明治17年9月 牧羊日誌¹⁶

(16年11月25日～17年5月迄)
牧羊惣代伊集院兼盛
農商務省農務局御中

③明治17年10月20日 伊集院兼盛建白¹⁷
西郷従道殿閣下

①の「牧羊豫算書」によると、「新村アリ戸数拾三、人口五拾余是レ島津又七氏去ル明治四年鹿児島ヨリ移住セシムル」とある。又七は、明治4年には口永良部島に移住していたことが豫算書より解る。又七の名は「箔」をつけたのだろうか。又初年度金四千百0壱円五拾銭必要で、二年度は金五百八拾九円五拾銭合計金四千六百九拾壱圓也とある。今では一億近いお金になる。内訳も記載されているが省略する。役員・肥料・備品の運搬費を一カ年金三拾円トス。などある。黄色に色づけした名前については後で説明したい。がしかし、明治22年で処分となる。ではその後又七は新たな挑戦をしている、又七62歳、息子久徴23歳である。

牧羊願人	
鹿児島県鹿児島	
島津又七	上村叶
有馬純行	平田正晴
木脇啓四郎	木脇藤次郎
岩元基	折田一郎
薬丸兼愛	小野田宏
伊集院兼盛	岩元禎
新納軍太郎	有馬亮吉
入来院重光	中原尚徳
本城中之助	黒岩休太郎
伊藤善十郎	馬場八次郎
九良賀野廣	法元盛行
嶋津久徴	浅江祥
新納軍吉	岩元祐
大久保猪之助	法元武二
寺師乗恒	木崎盛左衛門
有馬新八	九良賀野辰彦
今井兼高	小原兼武
染川岳一	江夏栄之
有川省吾	■元矢一
田代信一	田代安定
藤井清茂	木脇源次
田代尚太郎	岩元■
保証人	
有川純治	
■元武雄	

表7 口之永良部島牧羊願人名簿

第5章 又七と鹿児島市長予備選挙

明治21年4月17日に、近代的な地方自治制度が交付された。そして明治22年4月1日に鹿児島市が誕生する。初代市長を選ばなければならない。この時の市長の選任方法

¹⁵ 「口之永良部島（鹿児島）牧羊予算書 明治15年」より

¹⁶ 「鹿児島県大隅国郡口ノ永良部牧羊日誌」より

¹⁷ 「伊集院兼盛（鹿児島）建白 鹿児島県令宛士族牧羊ノ件明治17年7月14日」より

は、市会で市長候補者3名を選挙し、第一次当選者を市長候補者として県に申請し、知事は内務大臣に申請し、内務大臣が天皇の裁可を得て任命されることになっている。¹⁸

では市会はどうだったか、明治22年4月26日より3日間で、鹿児島市易居町の不断光院に於いて、級別に選挙をし、三級議員を12名、二級議員を12名、一級議員を12名選ばれた。合計36名の選挙が完了する。三級議員に福島巖が、二級議員に本田省三がいる。さて次は市長選である。明治22年5月9日、名山小学校に於いて鹿児島市会を開き、議長及び代理の選挙をし本田省三議長、代理に山田海三が選ばれた。¹⁹それを以て市長候補者三人を選出する為の選挙を実施する。第一次当選者 上村行徴（ゆきあき） 第二次当選者 右松祐永（すけなが） 第三次当選者 樺山資美（すけよし）となるが、「鹿児島市史 上村行徴日記」によると、「市長候補者投票ノ件」について、当市長候補者三名ニ係ル各投票数承知致度、折返御答相成度候也。明治22年5月20日に、鹿児島県市町村調査委員団が、市会議長本田省三殿へ回答を求めた。それによると「追テ投票ハ、一回ニ三名ヲ執行セシヤ、又ハ三回ニ執行セシヤ、是又、本文ト同時ニ、御解答ヲ煩シ度候也。」ある。要約すると、法律に基づき三回即ち、一人毎二投票した。第一次当選者の上村行徴は一回にして過半数をとり十八点を得、当選する。第二次当選者は、右松祐永、樺山資美、島津又七の三名何れも過半数に至らず、依って規定により、多数の得点者右松祐永と樺山資美の二人を選び更に投票を為して、右松祐永が過半数の二十点を得、当選。第三次当選者は、樺山資美、島津又七、本田省三の三名何れも過半数に至らず以て、前記の手続きを為し、樺山資美二十の高得点を得て当選致候也」と記載されている。注目は島津又七である。市長候補者選に出馬しているのである。当選には至らなかったが腑に落ちない事がある。議長が三回戦で出てきているのはどういう事だろうか。詳細は次回にしたい。当時の選挙を振り返ってみると、納税額に応じて市民を区別し等級を付けていた。三級議員の福島巖は、第百五十二国立銀行の頭取である。上村行徴、右松祐永、樺山資美については、後程触れたい。第百五十二国立銀行は、明治21年に廃業している。²⁰島津又七が、息子の名で出資した銀行が沖縄で廃業し、「口永良部島牧羊社」も抵当処分となる。決死の覚悟で市長選に出る靄砕かれる。さあ又七、次はどうする。

第6章 又七と久徴

島津又七（主殿）は、鹿児島市西田村薬師町に、2300坪の屋敷を持っていた。そして、永吉領から家来を連れてきた。²¹現在の鶴丸高校の裏あたりであろう。因みに西田村は、西郷隆盛の子西郷菊次郎も沢山所有しているのが確認できる。²²安政6年の「鹿児島城下絵図散歩」によると、一所持身分で大きな屋敷を持っている一部の者は、島津蔵人は676

¹⁸ 「鹿児島市史 第1編政治」P22

¹⁹ 「鹿児島市史」P8

²⁰ 「沖縄第152国立銀行の変遷」P49

²¹ 藤崎剛氏の西田村聞取調査の結果（樺山 真柱親族 おこはら）等

²² 法務局「土地台帳」より

坪、

島津求馬は528坪、島津左膳は573坪である。がしかし島津出雲は5714坪であり、島津主計は2842坪である。西田村の千申戸籍簿に基づく明治13年の戸長作成の戸籍簿の調査結果を明治21年に作成された徐籍簿の原簿によると、士族372人、平民340人、腑籍（国事犯—西南戦争による）10戸、無職者士族204名で、不明は143

西田村	士族	372人	平民	340人
	無職	204人		17人
	不明	143人		62人
	雑業	4人		151人
腑籍	10戸			

表8 西田村の士・兵

名である²³。如何に士族が何もしていなかったか、できなかったか、やる気がなかったか。後は想像にお任せするとして、島津久徴は、明治25年3月24日に、薬師町53番300坪の土地を取得して所有権移転している。明治29年12月23日に西田村薬師町52番を、売却し所有権移転がされた。明治29年は、久徴30歳である。「永吉（村）郷土史」によると明治33年に、鹿児島から島に移り又七と一緒に住んだ。²⁴とある。鹿児島に屋敷が無くなり家族は何処へ行ったのか、久徴だけが島へ移住したのだろうか。又七が移住する時（島へ行く時は）は、家族は鹿児島である。何故ならば久徴が30歳迄鹿児島に居たことが確認できた。又七69歳である。

第7章 又七の晩年

「永吉（村）郷土史」によると、明治44年（1911）9月26日鹿児島で死去、福昌寺に葬るとあり、病気で鹿児島へ帰ったものと思われるとある。²⁵84歳の生涯である。もう少し明治33年から明治44年を振り返ってみることにする。様々な説があるからである。まず1つ目に、又七は明治37年まで「牧羊社」を経営していたとある。2つ目は、久徴は島の区長を務めたとある。3つ目は、大正4年6月28日に、島の上水道の土地の名義が、農商務省より牧益吉他92名に移転され、その中に島津久徴の名がある。²⁶又大正4年には「贈位の儀上申」をし、島津又七正5位を授与される。²⁷

一つ目の明治37年迄「牧羊社」を経営²⁸したのは、又七であろうかと言う事である。又七、77歳である。久徴38歳。明治33年7月～大正5年6月は、牧羊責任者の薬丸猪八郎は上屋久村長を務めている。責任者不在の中で経営は出来たが旨くいかなかった、それも息子の久徴が跡を継いでいたのではないだろうかと推測する。2つ目の久徴は区長を務めたとある事だ。若い久徴にしてみれば親爺の遺産の後ろ盾により成り立っていたとする。何故ならば3つ目の口永良部の土地を所有しているのが、又七ではなく久徴である。だから移住してからの準備は整っていたとみる。しかし晩年には、大正13年東京へ移転

²³ 「鹿児島市史 第二巻」P767-776

²⁴ 「永吉（村）郷土史」P38

²⁵ 「永吉（村）郷土史」P39

²⁶ 上屋久町法務局の「土地台帳」より

²⁷ 「官報 第千三百二十四郷 大正五年十二月二十九日」より

²⁸ 口永良部島ポータルサイトより「島の歴史」P24

する際に、所有していた30haの²⁹土地を、一戸あたり700円³⁰で20人に売りつけていった。だが1万円、無い人は苦勞した。³¹お金の無い人は、サトウキビ製糖で得た金をつぎ込み³²5カ年で支払う³³人もいた。そして、硫黄鉱山600円³⁴で売却し後味の悪い移転である。当時一緒に行き開拓をした者達は、心穏やかではない人もいと古老から聞いた。又、又七の家屋面積24坪位³⁵であった。面積が広いか狭いかは解らないが、それ程大きな家に住んでいた訳でもないようだ。実は、口永良部島156番地が又七と久徴の家であった。³⁶

川上久良の口永良部島密貿易所地図について調査した大正8年9月の記録に、鈴四郎助なる者より聴取とある³⁷。大正4年の「字上水道」の土地の所有者の中に、鈴四郎助の名があるので、川上久良は事実本人より聴取したものと確認できる。がしかし「密貿易所」が一夜にして破壊された要因が銭屋五兵衛にあるとは言い難い。この事は前回にも書いたが、嘉永3年に名越左源太は口永良部島へ行った。そして銭屋五兵衛が獄中で没したのが嘉永5年であるからだ。たが名越左源太が「密貿易所」を書かなかった可能性も否定できない。何故ならば、名越左源太の大島遠島は、島津斉彬の偵察のようなものであった。³⁸

第8章 結論

島津又七の没した場所は、口永良部島であるか、それとも鹿児島であろうか、分かれるところである。「鹿児島大百科辞典」³⁹「西郷隆盛全集6」⁴⁰「新撰大人名辞典」⁴¹は、鹿児島で死亡し、「鹿児島大百科辞典」「西郷隆盛全集6」は病死とる。「鹿児島大百科辞典」には福昌寺とある。又「明治維新人名辞典」⁴²では年85で没。「口永良部歴史の謎」には、又七の墓図がある。没年は享年85才明治44年9月26日とある。「新村の歴史」⁴³によると、新村に自然石の墓石があるがこれは墓石だけであり、大正7年10月27日に久徴が鹿児島の南林寺墓地に改葬した。今痕跡は認められない。鹿児島市観光課によると大正2年より埋葬が禁止され「南林寺由緒墓」として保存されている。又七は口永良部で没し

29 「永吉（村）郷土史」 P39

30 「口永良部歴史の鍵」 P1

31 「新村の歴史」 P6

32 「新村の歴史」 P6

33 「口永良部歴史の鍵」 P1

34 「口永良部歴史の鍵」 P1

35 「口永良部歴史の鍵」 P1

36 「新村の歴史」 P1

37 「南国史話」 P330

38 「近代日本を拓いた薩摩の二十傑」 P195

39 「鹿児島大百科辞典」 P513

40 「西郷隆盛全集 第六巻」 P371

41 「新撰大人名辞典」 P302

42 「明治維新人名辞典」 P499

43 「新村の歴史」 P2

た事になるが。「口永良部」⁴⁴には、無名墓石と島津又七の墓図が書かれ、寸法も図られた記録がある。4段神道墓で、約2m39cmある。地面からは3m以上になるだろう。事実として墓石は口永良部に存在した。事実関係は「金岳神社文書」⁴⁵により確認が必要である。又久徴の墓は、東京多磨霊園13-2-53番にある。⁴⁶大正13年に口永良部より移転し同年12月に没した。58歳である。

第9章 小括

島津又七のお金についてお節介ながら調査してみた。明確ではないが、結果として言える事は、「上級市民」であった事は間違いない。時世で活躍し地位も得た。がしかし体制の波には取り残された。勿論島津又七個人の責任ではない。大久保利通や西郷隆盛の興した中央集権国家への裏側で、大手は触れず庇護されながらも面子を保ちつつ世の波に乗ろうと努力はするが、嘗て努力をしたことがないので、全くと言って無計画とプライドが高く、「武士の商法」と後世で言われる。又「士族授産事業の人柱たち」⁴⁷とまで命名された。此処に来て島津又七はどんな人生だったのか、どんな人物だったのか深層に迫りたい。時代の複雑な三次・四次方程式を解かなければならないだろうか。

登場人物（主な関係者）の概略

- ・ 福島 巖 西南戦役軍団本営 当県左来官員入県後出頭致居 5日開戦後未出頭人名 明治10年 福島巖 川口雪蓬ら⁴⁸。第百五十二国立銀行頭取。鹿児島市三級議員。
- ・ 有川純治 鹿児島商工会議所初代副会頭⁴⁹。第百五十二国立銀行出資者。口之永良部島牧羊社保証人。
- ・ 有馬純行 口之永良部島牧羊社願人。明治13年初代郡長⁵⁰。谷山郡徴兵事務官代理⁵¹。明治4年従六位、明治7年正六位、明治11年旭日中綬章、明治15年正五位、明治16年11月1日卒す青山墓地。⁵²
- ・ 薬丸兼愛 島津又七の弟、島津登久包の子、薬丸猪右衛門へ養子⁵³
- ・ 伊集院兼盛 口之永良部島牧羊願人。陸軍歩兵少尉正八位勲六等。明治31年2月31日卒す。⁵⁴

44 「口永良部」 P2-3

45 「金岳（金峯）神社文書」は唯一の口永良部島歴史書である。鹿児島神社庁保管

46 「島津家家臣団系図集」野田幸敬氏の調査である。

47 「郷土人系 中」 P272

48 国立公文書館アーカイブより

49 「鹿児島市史 第一巻」 P765

50 「鹿児島市史 第一巻」 P702

51 「薩摩の書役」 P27

52 「明治過去帳」 P178

53 「島津家家臣団系図集」 P272

- ・九良賀野廣 口之永良部島牧羊願人。又七の弟久馨の子⁵⁵
- ・九良賀野辰彦 口之永良部島牧羊願人。又七の子久徴の弟（駅長九良賀野六郎家嗣）⁵⁶
- ・上村行徴 第四百七十七銀行（鹿児島銀行）二代目頭取。西南戦争の時は大山綱良県令の下で大書記官、初代鹿児島市長、「なにしろ西郷一色にぬりつぶされた当時の市内にあって、政府への反逆をがんとして聞き入れず地元にとどまり、初代市長に返り咲いたのだから偉かった男」と勝目清がべたぼめする。鹿大ドイツ語教授上村行徳の祖父。⁵⁷
- ・右松祐永 明治16年5月郡長、西郷隆盛に協力し逮捕される、⁵⁸明治22年市長候補選
- ・樺山資美 明治22年市長候補選、西郷隆盛の私学校に入り乱後は、三州社を河野圭一郎らと設立、三菱商業学校に入り、朝野新聞社特派員となり清国へ、東京英語学校教頭、農林予備校校長、奏任官五等に叙せらる。同人社を再興。⁵⁹日本の豪傑西郷隆盛に尤も親信せらる。⁶⁰

参考文献

1. 鹿児島市. **鹿児島市史 第1巻**. 昭和44年2月.
2. **明治維新人名辞典**. 出版地不明：日本歴史学会, 昭和56年.
3. 吹上町. **吹上郷土史 中**. 吹上町：発行元不明, 昭和44年2月25日.
4. 伊丹正博. **縄第百五十二国立銀行の史的研究**. (香川大学経済論叢 36・(5)) 2012.3年.
5. 鹿児島県. **鹿児島県史 第四巻 第五章 第一節 士族授産事業**. 出版地不明：鹿児島県, 昭和18年3月20日.
6. 鹿児島市. **鹿児島市史 第一巻**. 出版地不明：鹿児島市, 昭和44年2月.
7. -. **鹿児島市史**. 出版地不明：鹿児島市, 1916.3.
8. 牧野謙吉. **沖縄第152国立銀行の変遷**. 出版地不明：中央相互銀行企画課.
9. 塩満郁夫. **鹿児島城下絵図散歩**.
10. 永吉町. **永吉(村)郷土史**. 出版地不明：永吉町, 平成17年4月.
11. 川島元次郎. **南国史話**. 大正15年5月.
12. 日本歴史学会. **明治維新人名辞典**. 1981.9.10.
13. 金岳小学校. **口永良部**. 不明
14. 矢野義幸. **新村の歴史**. 1990.
15. 安山登. **口永良部島の歴史**. 1966.

54 「明治過去帳」 P 553

55 「島津家家臣団系図集」 P 273

56 「島津家家臣団系図集」 P 148

57 「郷土人系 中」 P 273

58 「高島鞆之助 II」 P 101

59 「明治新立志編」 P 397

60 「日本帝国国会議員正傳」 P 221

16. 安山登. 口永良部の歴史の鍵 不明
17. 原口泉. 近代日本を拓いた薩摩の二十傑. 出版地不明：燦燦舎, 2019年11月1日.
18. 南日本新聞社. 郷土人系 中. 出版地不明：春苑堂書店, 1969.
19. 林 匡. 薩摩の書役. 出版地不明：黎明館調査研究報告・第28集, 2016.
20. 野田幸敬. 島津家家臣団系図集 上・下. 出版地不明：南方社, 2019年6月1日.
21. 物故人名辞典新訂. 明治過去帳. 1988.11.
22. 三崎一明. 高島鞆之助 II. 出版地不明：追手門学院大学経済学部, 2008年9月30日.
23. 秋野篠田正偲編纂. 明治新立志編. 出版地不明：大阪鍾美堂発刊, 明治24年4月.
24. 木戸鋁之助. 日本帝国国会議員正傳. 明治23年8月15日.
25. 原口虎雄. 鹿児島県の歴史. 昭和48年10月1日版1. 山川出版